

津戸三郎への返状

底本 井川定慶編『法然上人伝全集』所収

「法然上人行状絵図」第四十七卷

(昭和五十三年六月 三版本)

対校本 同『法然上人伝全集』所収

「九卷伝」

津戸三郎への返状

津^①の戸の三郎入道尊願、不審なる事をば、上人往生の後は、善恵房にたづね申けり。しかるに文暦の比、関東の念仏者の中に、善恵房の義とて、心えぬ事どもを、披露しけるにつけて、かの入道善恵房にたづね申ける状云、念仏往生の間の事、弥陀の本願にまかせ、善導和尚の御釈、故上人の御房の御すゝめによりて、上百年にいたり、下一日七日十声一声にいたるまで、念仏往生は、決定のよしをうけ給て、往生をねがひ候所に、仰^②の候とて、当時関東の学生の中に、無智にては、つとめたりとも、臨終しづかにをほりたりとも、往生したりとは思^③べからず。又学問^④したらむものは、たとひ臨終のとき、いかなる狂乱をし、くるい顛倒したりとも、決定往生なりと申候。この事御房中に、いかやうに思食たりといふ事、慥の便宜の

①

津の戸の……状云「津戸入道は、上人御往生の後は、不審の事をば善恵上人に尋申けるに、彼返状、全く上人勸化の詞に違せず。所謂文暦元年の比、関東の念仏者の中に、善恵上人の義とて、無智の者は念仏申とも不可往生、正念に往して臨終みだれずとも往生とは云べからず。又学生臨終の時、狂乱顛倒して終とも、決定往生といふべしと申ける間、善恵上人に尋申ける津戸入道の状云」

②

問「条の」よし「由」

③

仰の候……学生の中に「当時の関東の学生のおほせ候とて」

④

しづかに「閑にて」

⑤

思べからず「不可思」

⑥

学問「学文」

⑦

申候。この事「候なる此事」

とき仰らるべく候。加様に申せば尊願が、すべなき事を申とぞ、おぼしめしぬべき事にて候へとも、学問せぬ人の、なげき申あひだ申候云云 同年九月三日、善惠房の返状云、学問せざるひら信じの念仏は、往生すべからざるよし、この辺に申ときこへ候らん、極たるひが事に候也。ひらに信じて学問せざるも、又文につきて学するも、をちつく所はたゞおなじく、南無阿弥陀仏にて、往生すべき事にてこそ候へ、乃至或はひらに願力を信じて、わが心になりぬとおもひて、念仏する人も候。或は本願を信するうへに、いよいよことほりをあきらめむために、学問する人も候。意樂おなじからずといへども、往生はまたくことならず。しかるを学問する人は、学せざるをそしり、学せざる人は学問するひとをそしる事、あひたがひにきはめたるひが事也。たゞ所詮は、法蔵菩薩の、乃至十念のちかひにこたえて、衆生称念せば、かならずむまるべきことほりのきはまりて、すでに阿弥陀仏になりて、善悪の凡夫をもらさず、接し給へる

①仰らるべく「可被仰」
 ②「を」
 ③「を」
 ④「念点」
 ⑤なげき申……云云「内々歎申候間申候也と云々」
 ⑥「房」「上人」
 ⑦「云」と「学問」の間に以下の文あり、「阿性房のもとへの便につけて、御不審候ける様承候こそ存の外に候へ。其後、申披べきよし存ながら過候程に、御所勞て阿性房下向せられ候便を悦んで申候。」
 ⑧「事にて」
 ⑨ひらに「本願の理をよく思入てひらに」
 ⑩「事」なし
 ⑪乃至「ただし平信して、本願のありさまをもしらず、善悪の因果をも不弁、たゞ南無阿弥陀仏と申ばかりにて、往生すと心えたる輩、当世に多し是は一往尋ればさして思入たる処なし深く信ずる義候はざる也。是をばひら信じと申にも不及候也。加様の輩に向ては、本願のむなしからず、凡夫を撰するいはれ一分にてもかまへて心えよと申さし候也。是が聞へ候やらん正しく本願のむなしからざるを信たる上に、機に隨て」
 ⑫「立」
 ⑬「して思入」
 ⑭「して思入」
 ⑮「して思入」
 ⑯「して思入」
 ⑰「して思入」
 ⑱「して思入」
 ⑲「して思入」
 ⑳「して思入」

故に、釈迦もこれをとき、諸仏の証誠もむなしからざる事をたのみて御念仏候はゞ、更／＼御往生うたがひなく候。このむねをこそ、ふかく存ずる事にて候へば、人にも申きかせ、身にも存じ候へ取詮^②又同年十月十二日の状云、無智の人は往生せず。臨終正念にて命終すとも往生とは定べからず学生はたとひ臨終狂乱すとも、なをこれ往生也といふ事、返々ひが事にて候也。無智の人往生せずといはゞ、弥陀の本願すでに機をきらふになる、その理しかるべからず。他力本願を信ぜば、有智無智みな往生すべし。信心をおこして後には、学不学は人の心にしたかふべき也。本願を信ずる人正念に住せんうへは、なむぞ往生せずといふべきや。又学生は臨終狂乱すとも、往生と定べしといふ事、経釈の中に、その文惣じて見及候はず。道理また然べからず。凡往生極樂におきては、もはら本願を信ずるによる。またく学生によらず。また無智によらざる也。信心もしおこらば、有智も無智も臨終はかならず正念に住すべし。なむぞ

① 衆生称念「衆生称名称念」
 ② 接「拱」
 ③ 更／＼「更に」
 ④ 取詮「已上取詮」の割註なし
 ⑤ 「已上取詮」と又の間に以下の文あり「見參にて申まほしく候へども今は互にかなはぬ事にて候へば、あら／＼申候なり。阿性思入られたる事に候へばたづねきかせ給べく候云々」
 ⑥ 日「日に重て津戸入道に、遣はされたる善思上人」
 ⑦ 云「云当時関東の学者の中に、或は」
 ⑧ 定べからず学生は「不可定と云。或は学者」
 ⑨ 無智「若無智」
 ⑩ しかるべからず「不可然」
 ⑪ に「なし」
 ⑫ 「也」と「本願」の間に以下の文あり、「然を其智あさくして、学を好む輩、人をそしめて、おのれをほめんが爲に、如此の説をいたすか。また臨終正念なりとも往生を不可得と云事」
 ⑬ や「なし」
 ⑭ 「いふべきや。」と「又」の間に以下の文あり、「本願を信ぜざる輩の臨終正念は、実に住生と定がたし。不信の人の臨終をもて、信者を見たる衆、無其謂候。」
 ⑮ 道理また然べからず「又道理不可然」
 ⑯ も「なし」

学生にいたりて正念をすてむや。もし学生なりとも臨終狂乱せんは、もとより信心なき故也。但下品下生の、此人苦逼、不違念仏等の文に、異義を成ずるともがら候歟。この文の心は、たゞ死苦の失念なり。またく狂乱顛倒の相にあらず。されば釈には臨終正念、金花来応也といへり。たとひ病死の苦痛ありとも、念仏の行おこたらずば、かならず正念といふべき也。苦痛と顛倒とその体大にことなるゆへに候。かくのごとぎの荒説、御信用あるべからず。たゞ一向本願をたのみて、御念仏おこたらず候はむ事、本意たるべく候也。これらみな自筆判形の状等なり。亀鏡とするにたれり。仰でこれを信ずべし。

① もとより「是もとより」
不違「なし」

③ いふべき「云へる」
④ 苦痛と「凡苦痛与顛倒。」

⑤ 荒説……「べからず」「妄説不可有御信用、」

⑥ おこたらず……候也「不懈候事可為本意候也云々」

⑦ これら……信ずべし「本師上人の義理は請文の旨にあらはれ、善恵上人の存意又いまの消息等に見えたり。善恵上人已に自筆をそめ、判形をすえらる。未代の亀鏡也。仰で是を信ずべし。然を善恵上人の門流と号する人々の中に、義理若本師上人の請文、善恵上人の消息に違する事あらば、全善恵上人の義にあらず。末流の私の今案なるべし。あなかしこ。末の濁れるをもて、源のすめるをけがす事なかれ。」